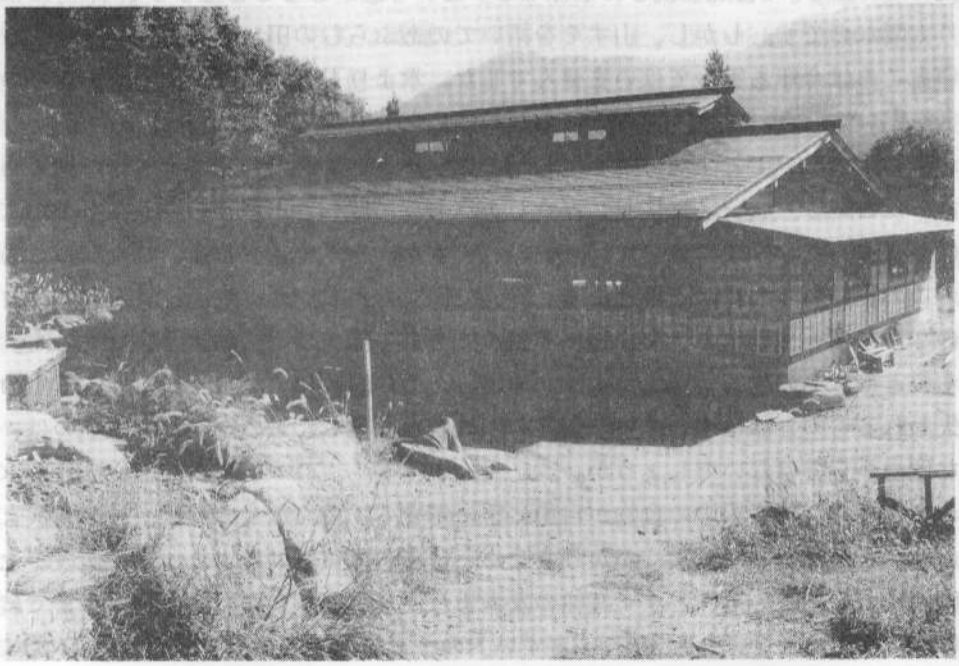
# あぶらむ通信

第16号　1995年12月25日　あぶらむの会発行

〒509－41　岐阜県吉城郡国府町宇津江　TEL 0577－72－4219



完成間近の「諸魂庵」

飛騨だより

今年は長い長い夏でした。四ケ月の雨なしで、敷地内を流れる小川もすっかり干し上がり、おかげでその水を利用して養っていたヤマメも全滅してしまいました。大変な夏でした。あぶらむ通信お手の皆様には、お元気でお過ごしのことと思います。

台風26号の影響で久しぶりの大雨となりました。晴耕雨読の身体となってしまった私です。事務局から通信の原稿の催促が毎日のように来るのですが、雨が降らないと気持ちがしっとりとせず、仲々机の前に座れないのです。この夏の天気で皆様にご無沙汰している間にもう秋となり、稲の刈り入れの季節となってしまいました。「時のたつのは何と早いのでしょう！」という、今や定番となってしまった枕詞しかでてきません。それとも地球の自転が早くなったのでしょうか。とにかく矢の如しです。

今年の稲作指数は107と、一転して大豊作とのことです。確かに昨年と比べればよく実っています。「日照り続きに不作なし」という諺があるそうですが、作物には水より太陽なのです。しかし、山すそを拓いてのあぶらむの田、山陰となり陽当たりの悪いところは今年も実ってはいませんでした。水よりも肥料よりも、太陽の恵みの大切さを思い知らされます。きっと、人間の成長も同じなのでしょうね。

お米の話のついでですが、米不足騒動のさなか、どこかの公園にタイ米が捨てられてあったというニュースに接し、どうしようもない悲しさと怒りのようなものがこみあげてきました。タイ米はまずいといわれますが、タイで食べると、こんなにうまい米がこの世にあったのかと驚きます。旅先で口にしたおいしい地酒、こんなにうまいものなら一本みやげにと、家に帰って飲んでもあの旅先での感動はうまれません。食べものとは、その生まれ育った土地から離れたその瞬間に、深いところにある生命力が失われるものと私は思います。自分の田畑から収穫したものが一番うまいのは、そんな理由からではないでしょうか。

お金さえあれば世界中の食物が自由に手にできる、そんな今の時代、良い時代といえるのかどうか、私にはよくわかりません。日本の米買付けにより、米の値段が上がり庶民は苦しんでいる、とタイ在住の友人より便りがありました。それほどまでに周囲に迷惑をかけて手にした米を、「まずい」の一言で捨てるなんて、生命に必要な食物をお金で安易に買えるという時代は、人間の心を貧しくすることはあれ、決して豊かなものにはしないでしょう。心の成長に必要な「感謝」ということは、「日々の糧を今日も与えたまえ」という切実な祈りと、それを今日も一日手にすることのできた喜びの中から生まれてくるものなのではないでしょうか。食物が安直にお金で処理され、今日も一日食べれることへの感謝を忘れた民からは、真の文化は育たないと思います。そのような意味で、水不足に悩んだ地域の人々には申し訳ないのですが、今夏の水飢饉は、まずいといって米を捨てるような私たち日本人には、天からの最大の恵みだったのかもしれません。

今年は梅雨もなく四ケ月間ほど一滴の雨も降らなかったおかげで、この春にスタートした黙想の家「諸魂庵」の建築ははかどり、もう7割方出来上がりました。ここまでくれば一気に仕上げたいような衝動にかりたてられるのですが、資金不足等の問題もさることながら、何よりも建てるという行為の一つ一つに祈りをこめてつくって行きたく思うから、残りはこの冬仕事に。明春にはすっかりとできあがっていることでしょう。その日が今から楽しみです。あぶらむの里の中心である宿が完成した時も嬉しかったですが、今度の諸魂庵は又、別の意味で嬉しく思います。なぜなら、諸魂庵建設は、ここまで歩んでこれたことへの、私たちの精一杯の感謝の気持ちだからです。

宿建築中の90年7月29日、私は大工さん達と一緒になって、屋根のたる木打ちをしていました。お昼のポーが鳴り、これ一本打って終りという時、私は誤って屋根より落ちてしまいました。その時の体験は、忘れることのできないものです。それは暗黒の宇宙に大きな渦がまいており、あおむけになった自分の身体がその渦の中に静かにまき込まれて行くのです。しかし不思議なことに、もう一人の自分がどこか高いところで、そのゆっくりと回転しながら暗く深い渦の底にまき込まれて行く自分を見ているのです。「あぁ、あの渦の底が死の世界なのだなぁー」と、もう一人の自分は他人ごとのようにつぶやきながら見ているのでした。私の身体がその渦の底に入った時、私の身体は強く地面にたたきつけられました。全身が一瞬にして熱くなり、白昼夢からさめ現実にもどるやいなや、すぐに意識が薄れて行きました。それはまるで遠近画法の絵のようで、ものすごい勢いで点になって行きました。その時また、もう一人の自分が、死にむかって意識が薄れて行く、そんな自分にむかって大きな大きな声を発しました。するとどうでしょう、点になろうとしていた自分の意識が激しい勢いで逆もどりし、画面一杯にまでもどってくるのです。その時に私は始めて、正気にもどったのでした。正気にもどった私を待っていたのは呼吸困難、苦しくて苦しくて最初の一息が吸えないのです。七転八倒の末にやっとできた一息、私の短い間の死生旅行が終わったのでした。結果として肋骨三本骨折ですんだのですが、それは奇跡だったと思います。その日の前日、電線の地下埋設のために掘り出した頭大の石の上に、私の身体が落ちたのでした。もう3～4㎝ずれておれば背骨、何もなければ頭か腰が先に落ち、いずれにしても大ケガをする所でした。

病院にかつぎ込まれてから三日目、私は恐る恐る足の親指を動かしてみました。しっかりと動きました。嬉しくて涙がでました。大事に至らなかくてよかったという思いと共に、自分は「守られていた」という思いで一杯になりました。あぶらむの里づくりを始めて

8年目、その間、多くの不思議な出来事の連続で一杯でした。それらのことを思うと、今こうして世に在る者だけではなく、この世の働きを終えて逝ってしまった人々までが、私たちを見守ってくれているのだと、私はそう思わずにはいられませんでした。そうでなければ、この間の様々の不思議の説明がつかないのです。

「私は我が祖国の上に輝きいずる暁を見ずに死ぬ。暁を見ることのできる諸君、君たちはそれを喜び迎えなさい。しかし、闇の間に斃れた人々のことを決して忘れるな！」これはフィリピンの英雄ホセ・リサールの言葉です。100年ほど前、祖国がスペインの支配から解き放される直前に、彼は処刑されたのです。その彼が、その著書「ノリメ・タンゲレ」（私に触れるなの意）の中で、このように云い残していったのです。

一人静かに振りかえってみますに、一人の人の喜びの背後にどれだけ多くの人々の苦しみがあるか、一つの生の後にどれだけ多くの死があるのかを、思い知らされます。一度アジアの地を旅すれば、日々の糧さえ口にすることの出来ない多くの人々の現実と出会い、腹一杯口にすることの出来る世界に身を置く者として、多くの葛藤にさいなまれます。食べれるということは、食べれないという現実があって始めて成り立つという、この単純な事実に気づかされるのです。そこからは、十二分に日々の糧を口にすることのできる者として、あなたはどう生きるのかと、静かながらも鋭く問われるのです。

また、私個人をとってみても、実に多くの学びを、多くの人々に教えられてきました。しかし、それらの人々はもうこの世にはいません。あぶらむの里を訪ねられた方々が、どうしてこのようなことができたのかと訊ねられます。私は答えます、私には強い味方があるから、と。

あぶらむの目標である「人生の良き旅人づくり」、よき旅人に求められる能力の一つに、「転んだら起きる」という世界があります。これは沖縄のライ園のオバーさんに教えられたことです。サイパン島での激しい戦闘にまき込まれ多くを失い、その上になお病気、数えきれない程の人生の重荷を背負いつつもなお、「長い人生、山坂あるよ。転ぶこともあるよ。でもね、転ぶことを恐れてはだめですよ。転んだら起きあがりなさいよ。」その人は、その一言を自分のものとするために、あの山ほどの苦悩を背負ってこられたのだと思いました。「転んだら起きる」、この言葉が私の中に根づいていなかったら、私にはこの里づくりはできなかったでしょう。このように、私の心の中には、これまで出会った人々からいただいた珠玉の言葉が満ちています。それが私のエネルギー源であり、私にとって最も強い味方であると思っています。

そのような意味では、死せる人々に応えるような自分の人生でありたいと願っています。

このような理由で、黙想の家「諸魂庵」づくりは、私たちの感謝の表現です。あぶらむの会を発足して8年余、やがて記念の10周年を迎えようとしています。その記念事業の意味においても、諸魂庵を心をこめて建て上げようと願っています。

末筆になりましたが諸魂庵建設のため、これまでご協力下さいました方々に、心よりお礼申し上げます。

尚、皆様方による今しばらくのご協力が必要な状態です。ご支援いただければ幸いに思います。

秋が来れば冬の準備に追われます。あぶらむの里はこれからが心安まる時、皆様のおいでをお待ち申し上げております。

時節柄、ご自愛下さいませ。

あぶらむの会代表　大郷　博

# 《黙想会レポート》

〔黙想会説明文〕

昨年に続き、今年も９月23日から２泊３日の日程で「黙想会」が行われました。高校１年生から50才代の方までの計20名の参加者が、塩沢賢一先生指導のヨガや、あぶらむの自然を聴く時を持ちました。次に掲げるのは、一人の参加者の声です。黙想会に参加した高校一年生の須藤祐美子さんの感想文をお届けします。

## 「声なき声を聴く」に参加して

須藤　祐美子

温かく包みこんでくれる山、見守り続けてくれる川、そして生き生きと楽しく生きている里の人々。そんなめぐまれた場にいた２泊３日は本当に幸せでした。何をしてもなかなかうまく行かずいきづまっていた私に、大きな大きな安らぎを与えてくれました。そして本当の幸せ、豊かさを再確認させてくれました。けしてお金持ちや物持ちが幸せなのではなくて、本当の幸せとは、ほんのささいな小さな幸せも大きな幸せとして感じられることや、一緒に喜べる仲間がいることだと思う。人は苦しさを感じたなら幸せは人一倍感じられると思う。そして人は一人では生きていけない。いつも助け合って一緒に生きていく仲間が必要だと思う。重荷があるときは半分しょってくれ

る友が必要だ。いずれは自分で解決しなくてはならないことだけど、つかれた時は半分持ってもらっても良いと思う。いつも人はおたがいに与えたり与えられたりをしている。疲れた時は荷物を少なくして一緒に考えたり周りから見守ったり…。けっして一人ではない。いくら迷惑をかけていると思ってもそれはもしかしたら相手にとってやりがいのあるうれしいひとときなのだ。嫌な人なら一緒にいないし、助けたりせずだんだん離れていく。そして本物の友は一緒にいつまでもいる。私は病気をした時、迷惑かけるだけの私なんていない方が良いのではないかと思ったこともありました。でも母親が何も出来ない手を焼かせる子どもをいつでもめんどうみるのと同じように母親に希望や生きがいを与えているのかも知れないと。ただ、その人が生きているだけで本当に幸せになれることもあるのだから…。人はやさしくされている時与えられてばかりいるように思えるが、実は人にも与えていることもあるのだなぁと思った。役立たずでも生きているだけで喜んでくれる人もいるんだなぁと思ったら、肩の力が抜けて、本当の意味で生きることの大切さ、素晴らしさが感じられた。そして神がまた私にいろんな世の中を見てこいといっているようでした。人は自分、自らが体験したり、今、その場にいないとわからないもので、頭で分かっていてもなかなか実行できないものだ。私も心から親切に出来るまで、ずいぶん時間がかかりました。本当にやさしくできるには、自分がたくさんのやさしさにめぐまれた人にしか他人には与えられないものだと思う。自分でもっているもの意外は他人には与えられないものだから、無理してやるやさしさや、親切はただの同情でかえって失礼だと思う。ただ単にかわいそうだなんて軽々しく言えないしもっともっと深いものだと思う。自ら体験してつらいことだと分かるから人の気持ちが分かったり、やさしく出来るのだと思う。私は全然何も出来ないし、弱いしわがままだけど、まず自分を好きになることだと思う。自分の短所と思っていた場所も好きになってしまえば良いと思う。中途半端ではなくて、とことん追求してそこを良い風に使えばいいと思う。自分を変えようとせず、ありのままの、そのままの自分を好きになって、そこから第一歩をふみ出さなければならないと思う。人にはちゃんと輝くものや、場があたえられるもので、そこでなければ本当の自分は見つからないと思う。例えば、馬が草原を走っている姿はとても美しいが、川を泳いでいる姿はあまり輝かしいものではない。やはり一人一人与えられた、輝くべき場があるのだ。人のまねをしてもその人らしくないし、同じ人間なんてこの世に二人も必要ないはず。みんな一人一人ちがうから、この世にいれる、そしてまねごとなどをしても、つかれていつもたえられない日々を送ることになる。

私はいつでも自分に素直に生きたいと思う。つかれたら休めばいいし、やりたくなったらやればいいしと思う。背のびせずかかとをおろせばいいと思う。本当に生意気なことばかりいって頭でっかちだけど、私はすべてにおいて年齢に関係なく人間として、本物の仲間として話をしているつもりです。でも、こんな素直に率直に言えるのはこの齢だからで、大人になったらやっぱりその人にあった話や時、などを考え言葉を選

んで話さなければ、ただのがんこな人になってしまうかも知れない（笑）。だからあんまり大人になりたくないなぁと思う（笑）。でも地道にやっていきたい。本当に素晴らしい人たちに出会い大きな発見をしました。これからもいだいな人たちと、どんどん話をしてみたいです。なんでもそこからがはじまりだと思う。会って話して生活して…。そうやって本当のことを知ってゆく…。

私はけっしてチャクラは見えなかったけど、もっともっと大切な目に見えぬ太くて長いきずなやわかち合う心がありありと見えたような気がしました。本当に人と会うということは大きなきっかけなんだなぁと思った。そしてつくづく自分はすごく未熟で小さいと思った。でもそれと同時に私は一人ではないんだと感じ、私の唯一の宝ものは今まで会った人達だなぁと強く強く思った。

みな、ああやってふるさとから旅立ち、別々の道や生活にくり出してゆく。そして今まで通りのたわいない生活にもどってまた一歩一歩歩いてゆくのだ。そしていつかまた、なつかしい風を感じながら、ふるさとの土地や友をさがしもとめあぶらむにもどってくる。人はみな行きつく場所は同じだと思う。そして静けさと温かさをもとめてここあぶらむに本当の幸せ、豊かさというものをさがしてまたたくさん充電してもどってゆくのだと思う。だからいつまでもあぶらむの里はかわらない温かさを持った心のふるさとでいてほしいと思った。

シリーズ　今、現場から

# 一本の鍼から覗いた世界

阿久津　富　男

朝８時30分、一杯のコーヒーを飲み終え、まず自分の手足に鍼を打つことから治療室での一日が始まります。手首の脈を診ながら自分の体調と脈を照らし合わせ、そして穴（ツボ）を選び鍼を施します。飲み過ぎた時の脈、風邪気味の時の脈、腹をこわした時の脈、寝不足の時の脈、それぞれ微妙に異なっています。速い脈、遅い脈、太い脈、細い脈、硬い脈、ふにゃけた脈、浮いた脈、沈んだ脈等その時の健康状態を表わしています。そして脈は季節に応じて変化して行きます。何故に鍼灸師が脈を診るのか不思議に思われるでしょう。

○古代中国の医学

今から数千年前古代中国で体系化された鍼灸・漢方薬を中心とする医学では、人体

を５臓の働きを中心に捉えました。御存知の肝・心・脾（今の膵）・肺・腎の五つです。最近耳にすることの多くなった気。身体を循環し栄養を供給している血。身体の60％を占める水。これらをコントロールし、人体全ての構成部分を機能させ生命を維持する中心が５臓です。胃・大腸・小腸・胆・膀胱と呼ばれる腑も五臓の統制のもとで働くのです。この生命維持機構に問題が生じたのが病気です。脉による診断については少し触れましたが、診断方法を大きく分けると四つになります。「見る」「聞く」「問う」「触れる」です。顔色・体格・目の精気・舌の状態等を見、声の状態・臭いを聞き、病気の成り立ち・健康状態を問い、脈・腹等に触れ、その状態を診る。これらを通して病気の原因、状態を把握し病気をどのような方法で取り除くかと言う治療方法を決めるのです。

鍼灸の場合ですと使用する穴、ドーゼが決まり薬の場合ですと、薬の種類、量が決まります。

○人体の不思議

経絡と言う言葉を御存知の方は少ないと思います。五臓六腑を連絡し全身を隈無く循る気・血・水の通り道です。穴（ツボ）とはこの経絡上に存在し特に気の集まり易い場所です。病気の際には陥んでいたり押すと痛んだり逆に感覚が鈍いなどの反応が表われます。特に重要な穴は手では肘から先、足では膝から下に有ります。そして正しい診断により的確な穴が選ばれた時、一つの穴に鍼を当てただけで恐いくらいの脈状が変わります。脈は身体内で気血水がどのように循っているかを示してくれます。この脈の変化が治療の指針となります。勿論それに伴って症状が改善されなければ話になりませんが。一本の鍼を接触するだけで身体は微妙に時に顕著に変化します。脈状は勿論、色つや、息づかい、筋の緊張、寒熱の度合い。私はまだ駆け出しなのでおおぎょうな事は言えませんがこの不思議な現象は確かに起こるのです。

○気が病む

治療室には様々な症状を持った人が来ます。患者さんを診ていて思うことはいかに気持ちが大事かと言うことです。言い換えればいかに精神的な動揺が恐いかと言うことです。病気の原因には、自然環境的（風・熱・湿・寒・燥）、精神的（喜・怒・思・悲・恐）、物理的（飲食・労働・ＳＥＸ・外傷等）なものが考えられますが、精神的原因によるものは身体の中心である五臓に直接影響を及ぼし重篤な傾向を示します。精神的な活動と五臓は密接に繋がっているからです。心－喜、肝－怒、脾－思、肺－悲、腎－恐と。ストレスの多い環境の中ではイライラつまり怒りにより肝への負担は増えます。肝機能の低下に加えて、肩背部の凝り、高血圧、メマイ、不眠・口渇などの症状を呈します。繊細な人の場合は恐れとなって表われ、動悸、不眠、のぼせ、立ちくらみ、口渇、無気力、小便不利など腎の働きに支障が出ます。心配事があると食欲が沸かない、眠れない等はよく経験する事ですが、精神的なものが健康に与える影

響は大きいのです。病気は様々な原因が複雑に絡み合って発症しますが、精神が安定し内側の五臓の働きがしっかりしていれば、風邪をひいたにしろ、飲食の度を過ごしたにせよ、病気も深くは入れないのです。

○人体と自然

動物・植物・鉱物・形のあるもの無いもの、あらゆる物事が天と地の間に存在し、人間も例外ではありません。天は陽の光により地を照らし、地は万物を載せはぐくみ育てる。天は雨を降らせ地を潤し、やがて雨は天に昇り雲となりまた雨となる。余すことも不足することも無い天地の交流の中で全てのものはこの「天の気」「地の気」を受け、発生し、やがて消滅します。呼吸により「天の気」を食物により「地の気」を受けて人間の生命も営まれます。「天の気」「地の気」と言っても源を辿れば一つのものです。これを神と呼ぶことも出来ます。人間の中心は五臓にあると申しましたが、五臓とは神様の蔵と言う意味です。肝には魂、脾には意、肺には魄、腎には精、そして心には全てを治める神が舎り天地の交流の中で気血水を統制し生命を維持しています。そして父母の交流によりそれぞれに舎る神が精卵に下り融合してまた新たな生命が誕生するのです。この様な考え方を中国では「天・地・人三才の思想」と呼びます。天と地と人とひょっとしたらそこには何の境も無いのかも知れません。唯一同じ流れが在るだけなのかも知れません。自然の流れに逆らわずに生きる。それが与えられた命を全うする道です。発生の春には心も体も外に伸びやかにし、盛長の夏には盛んに汗を流し、収果の秋には徐々に心体を落ち着かせ、蔵精の冬には充分に心身を養う。季節に適った衣・食・住を施し、天地の流れに心身を委ねる。その流れに逆らい五臓の働きに狂いが生じたのが病気です。穴を使って人間が直接人体に働き掛けるのが鍼灸であり、植物、動物、鉱物が有する天地の気を使って働き掛けるのが漢方薬です。

○玄の道

全てを包み込み混沌とそして濤々とした天地宇宙の流れ。やがて死とともにその流れそのものになってしまう命。昔老子と言う人はこの流れを「玄の又玄」と言い表しました。玄ー黒よりも黒い玄、物事の始まり・どこまでも窮することの無い源の源、そして確かに存在する流れ。鍼灸師と言うちっぽけな業から、かつて太古の人達が棲んでいたであろう世界がほんの少し覗けるような気がします。そしてその世界は紛れも無く今私達が棲んでいる世界なのです。

醫は天と地と人の交流なり　癒は神の恵みなり　　游玄洞主

# 滞在ノート

## ――― 42.195kmナイトハイクを終えて ―――

鵜川 雅行

8月1日より3泊4日、あぶらむの里を利用して湯島サッカーチームの合宿をやらせていただきました。今回あぶらむの里を利用して合宿を行うことになったのは、今年の6月ごろ大郷先生と話した、親子でナイトハイクをさせ、親子の絆を深めるようなプログラムをやりたい、ということがきっかけだった。

4月から文京区の湯島小学校に転勤した私は、前任者が作った地域サッカーチームの監督をすることになった。私自身サッカーとは縁のない人間で、Jリーグが始まっても、なんら関心を示さなかったほどである。いったいどうしたものかと思いつつも日々子供達とボールを追いかけるうちに、子供達のサッカーに対する情熱を感じることができた。しかし、サッカーの技術を教えることのできない私にとって、何ができるかが悩みの種だった。2カ月間に2回ほど練習試合をしたが、どの試合も完敗。しかも相手は4年生だったり、2軍のチームだった。技術が未熟なことはもちろんだったが、試合をしている子供達の姿から、現代っ子のかかえる"あきらめのはやさ"や"自信のなさ"を感じさせられた。

7月の終り頃、保護者の方から「ぜひ合宿をやって欲しい」と頼まれ、それなら、大郷先生と話していた42.195kmを歩かせて、彼らに自信をつけさせよう。サッカーは教えられないが、自分が学生時代にかかわった、長い距離を走ったり歩いたりすることなら、自分にも何か伝えることができると考えた。

合宿に入る2日前にあぶらむの里をおとずれ、大郷先生とコースの下見や今回のプログラムについての打合せをした。今回のテーマはいったい何にしようか？いろいろ考えたあげく、①競い合う②助け合う③やり遂げるの3つの柱ができた。これは、今回のナイトハイクで子供達が取り組んで欲しいことであり、サッカーでも大切な要素となるからだ。

8月1日、いよいよ子供達が飛騨古川の駅に到着した。子供達は、「スゲー遠いー」「チョー疲れた」を連発しながらも、これから何が起こるのかという期待が感じられた。宿について、オリエンテーションをした。子供達には、ナイトハイクをする話しはしていたが、42.195kmと言う距離の話しはしていなかったので、まさかこんなことになるとは思わなかったようだ。時間がたつにつれ、子どもたちの中には、ナイトハイクが心配だったり、何とか歩かないですむ方法はないかと考えたりしている子もいた。

合宿2日目の晩、いよいよナイトハイクは始まった。私自身長い距離を走ることは経験していたが、ナイトハイクは初めての経験で、コースも一度オートバイで下見をしただけであったため不安があった。しかし、今までの100kmリレー、スパルタスロ

ンの伴走経験から考えれば、たいしたことはないだろうと考えることにした。歩き始めてすぐ山道にさしかかった。あたりは暗く木もうっそうと茂っていた。しかし、子どもたちは意外と暗闇に対して恐怖感を抱いていないようだった。（もしこれが１～２人だったらとっても恐いということは後で言っていたが）ところが山の中に入り、懐中電灯を消そうとすると「見えない前が全然見えない」とおびえた声で騒ぎだす子が出てきた。グループのみんなが、「よく見ろよ見えるじゃないか」と勇気づけても、なかなか聞こうとはしなかった。簡単なパニック状態に陥ってしまったのだろう。心を落ち着かせ、「よく自分の目で見ようとしてごらん」と言うと「少し見えてきた」と安心したようだった。また、「あと５㎞で20㎞地点だからがんばろう」、このペースで歩くぞ！」と言うと、「そんな先のことは考えるのはやめようよ、気楽に行こうよ」という言葉も帰ってきた。そこで、もし目標も持たずに気楽に歩き続けたらどうなるか、グループのみんなで考えてみた。こんな暗い中をいつまでも歩くのはいやだ。やはり、目標を持って進むことで自分を勇気づけがんばれるんだ、という結論に達した。30㎞を越えたあたりからは、みんな睡魔との戦いになった。長い峠は、誰かが話をしないと恐いしすぐ寝たくなる。「何か話してよ！」などと甘えてくる子もいた。その都度、楽しくなる話や、くだらない話しをしながら、足を一歩ずつ前に進めた。あと４㎞ぐらいという所で、太陽が顔をのぞかせた。たった５分の休憩の間にもぐっすり寝ていた子ども達も、すっかり元気になった。しかし足にできたまめが痛くて、思うようには歩けない。中には早くつこうとみんなの先頭に立ってどんどん歩いていく子もいた。いよいよゴール、歩き終わった子供達は、ぐったりと疲れていた。

合宿の最終日、子供達は一人ひとりふりかえりをした。「もう２度と歩きたくない」という子もいれば、「いい経験になった」という子もいた。最後に、完走賞として、ペンギンのデザインの首飾りをあげた。どの子供達も嬉しそうに、そして誇らしげにその首飾りをかけていた。

この合宿で子供達は、川遊びなどで自然とふれあうことができた。また、夜のミーティングでサッカークラブのことを話し合った。そしてナイトハイクでは自分と向かい合い、ひとつのことを乗り越えた。そのことが自分にとってどうだったか、言葉ではあまり上手に語ることは出来なかったけれど、彼らの心の中には、「何かできそうもないことも、やればできるんだ。」という自信が残ったことだと思う。また、普段サッカーでしかつきあわない仲間たちと、こんなに親密につきあうことで、仲間のいてくれる嬉しさ心強さに気づいたことだろう。今後このことがどう生かされるかは、一人ひとり違ってくるだろう。しかし、この合宿が、彼らにとってかけがえのない体験になったことは、間違いないだろう。

最後に、この合宿を快く引き受けてくださった大郷先生はじめ、協力をしてくださったあぶらむのスタッフの皆さんに感謝します。ありがとうございました。

# 後援会事務局だより

日頃、“あぶらむの里建設募金”にご協力いただきありがとうございます。
現在いくつかの会費、募金の種類がありますので、以下に整理しておきます。

1．正会員　個人会員　会費年１万円　　3．黙想の家建設募金　一口１万円
　　法人会員　会費年５万円　　4．一般寄付　　金額任意
2．賛助会員　　会費年３千円

各会費、募金とも、振替用紙に必ずその種類を明記して下さい。
皆様には、重ね重ねご迷惑をおかけし申し訳ありませんが、あぶらむの会の益々の発展のためにお力添えの程、よろしくお願いいたします。
会費および募金の振替口座は次のとおりです。
郵便振替　名古屋０－８８０６５　あぶらむの会

**黙想の家建設募金者**（10月31日現在・敬称略）
牛込聖バルナバ教会　松岡和夫　富田　桂　北村晴光　祈りの家教会　越田　信　西垣正子　菊澤満喜子　原川恭一　池崎純一　掛川尚子　広瀬留男　吉植よし子　川上詩郎　園村卓大　筒井啓子　伊藤信義　木田献一　酒井篤子　一丸直也　穴井悦子　佐藤節子　阿部潮音　平野幸男　味岡和子　杉山千鶴子　島田信弥　岡登正子　忍　昭宏　横浜クリストファー教会　矢澤信夫　萩原康宏　森本晴生　石地隆男　堀内　昭　長間四郎　大下大園　鏑木　静　志村弘子　高橋清子　和田八束　後藤元彰　篠宮慶次　菊地周子　野崎久子　佐口　哲　金沢恭三　熊谷一綱　竹田純郎　北村征男　久田広子　山本　百　長谷工業（有）　森元光生　玉城豊吉　大杉匡弘　尾崎和廣　三根則子　崎長恭子　松尾　隆　渡辺　幸　松井明子　比嘉良侑　松島理恵　橋本禮子　松岡秀子　加納　厚　松丸一夫　糸数敦子　新垣タケ　糸数宝善　上原芳子　新城則子　上原英一　新城甚栄　田島義信　又吉フミ　畑井正春　須藤圭治　小仲　宏　百井幸子　折茂謙一・祐子　味岡敏江　山口昭彦　ガールスカウト岐阜県支部ユンゲの会　鈴木芳子　塩川寛昇　又吉亀次　中西庄之助　沼尾紀勝　大城ツル　桃原松五郎　江洲良秀　遠田聖子　紅林みつ子　本田リン　喪アヤ子　細川哲士　井原洋子　武原春美　西村元宏　西川照子　小沢福夫　高橋　保　弥永昌吉　井田三郎　大城恵子　山城タケ　大嶺佐智子　岸井孝司・ミツ子　入川ヨシ　片岡　剛　宗像和雄・千代子　高野　勇　堀江あつみ　小野健一　田村由紀子　小泉恵子　高瀬留美　竹内　寛　藤倉待子　渡辺多茂夫　下田英一・由香　政井忠彦　リチャードメリット　中村ひろ子　矢後和彦・正子　山口千尋　平野淳子　佐々木亜子　半田節夫・純江　佃　正昊　工藤真喜子　大城タケ　鎌田玲子　大下春子　笹岡淳也　塩田純子　吉本　正　母と子を守る会　小沢征代　嘉数弘子　賞間美帆・明衣　山下とみ子　河野裕道　西平　直・則子　田中一有　大沢浅香　楡原　伸　斎藤　真　福田詩郎　速水敏彦　飯塚多賀子　小林　綾　尾崎　桜井　恵　崎長　央　神宮テニスクラブめ組　萩原久子　牛腸達也　杉浦教二郎　栗原千代　国見　登　戸塚恭子　太田喜元　武田　宏　加藤真理子　梶原恵理子　佐々木亜子　鈴木正士　黒木一郎　吉田　太　京都婦人会有志　谷祐一郎　加倉井佳子　米田博行　湯島サッカーチーム　関本　肇　鵜川久・貴子　岸元忠義　荒木　譲　谷　昌二　小林賢三　岡野　峻　安斉勇夫　湯田啓一

**正会員申込み者**（10月31日現在・敬称略）
直井雅子　須藤圭治　村田明美　清水智覚・幸子　宮田洋子　大山直子　長田英子　外村民彦　大江真道　中沢　隆・由美子　今村一夫　坂井　瑩子　小笠原忍　大居雅治　刑部勝弘　片岡　剛　川崎千栄子　岸井孝司・みつ子　久世治靖　小林賢三　小杉慶子　小林　綾　斎藤真　島田啓介　杉浦めぐみ　須藤秀夫　高盛　茂　宮尾春世　村岡　明　山口悦子　広瀬勝也　野村　桂　安達宏昭　岡野　峻

**賛助会員申込み者**（10月31日現在・敬称略）
木村恵津子　金沢恭三　金子一郎・晶子　折茂謙一・祐子　鈴木信子　長澤綾子　佐倉淑子　坂本敏子　加藤真理子　江間恵美子